

February 8, 2026

苦難と栄光

コリント第二 4:16-18

4:16 ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

4:17 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすのです。

4:18 私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。

16節では「外なる人」と「内なる人」とが比べられ、「外なる人」は「衰える」けれど、「内なる人」は「日々新たにされる」と言われていました。きょうの17節では「苦難」と「栄光」が比べられ、「苦難」は「一時」のものだが、「栄光」は「永遠」のもの、「苦難」は「軽い」が、栄光は「重い」と言われています。これは、どういうことなのでしょう。また、この言葉は、私たちの日々の生活の中でどのように働くのでしょうか。

一、パウロが受けた苦難

ひとくちに「苦難」といっても、さまざまなものがありますが、一番感じやすいものは、身体の苦痛でしょう。指先に小さなトゲが刺さっただけでも、全身で痛みを感じます。尿路結石の痛みは出産の痛みほど大きいと言われます。私は、日本にいたとき、それを体験しました。土曜日の夜から痛み出し、日曜日の礼拝では冷や汗をかきながら説教しました。礼拝に出ていた看護師が私の様子がおかしいのを見てとって、礼拝が終わるとすぐに ER に連れいってくれました。診察を受ける前に結石

が出たようで、痛みが消え、治療を受けることなく帰ってきました。他にも、何回か「ギックリ腰」で立てなくなったこともありましたが、私の場合、痛みは「一時的」なものでしたが、癌や神経痛などから来る慢性的な痛みには苦しむ人にとっては、自分が今受けている痛みを「一時」のものだと言うのは難しいと思います。

また、「苦難」は身体的なものばかりではありません。精神的なものもあり、そのほうがもっとつらいかもしれません。身体の傷は時間が経って癒えていっても、心の傷はいつまでたっても癒やされないことがあるからです。

使徒パウロは、自分の受けた苦難についてこう書いています。「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうです。労苦したことはずっと多く、牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました。ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難にあい、勞し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。」（コリント第二 11:23-27）パウロがこう言ったのは決して誇張ではありません。パウロは本当に、たびたび死に直面するほどの苦難を受けたのです。

この箇所が続いて、パウロはこうも言っています。「ほかにもいろいろなことがありますが、さらに、日々私に重荷となつ

ている、すべての教会への心づかいがあります。だれかが弱くなっているときに、私は弱くならないでしょうか。だれかがつまずいていて、私は心が激しく痛まないでしょうか。」（コリント第二 11:28-29）パウロは身体的な痛みだけでなく、諸教会のためにも、「心が激しく痛む」ほどの精神的な重荷を負っていたのです。なのに、彼は、そうしたことを「軽い」と言っています。それは、パウロが自分の受けている苦難の意味を知っていたからでした。

二、苦難の意味・意義

どんなに我慢強い人でも、意味のないことで苦しむのには耐えられません。昔、懲役囚にはひどい労働が課せられましたが、それでも、その労働に意味があれば、耐えられました。けれども、人は無意味な労働には耐えられないのです。ある懲役囚たちに、地面を掘って土を運び、それを積み上げるようにとの命令が与えられました。それが終わると、別の場所に行って地面を掘り、土を運んで山を作るように命じられました。やっと、二箇所土の山を作って、ほっとした囚人たちでしたが、今度は、最初に積み上げた土の山を崩して、二度目に掘った場所を埋めるように命じられました。そして、それが終わると三つ目の場所を掘り、そこに二度目に掘った土の山を崩して埋める。そして四つ目の場所を掘る。また、同じことを繰り返す。それが延々と続くのです。何の意味もない懲役に囚人たちは気が狂って倒れていったと伝えられています。

人は、自分がなぜ、何のために苦しんでいるのかが分かればその苦しみに耐えられます。病気の治療のために苦痛を受けることがあっても、それで病気がよくなるのだと思えば耐えるこ

とができます。人々から批難されたり、中傷されたりしても、それが、真実や正義を守るためのものであれば、耐えられるでしょう。しかし、苦しい治療を受けても何の効果もなければ、また、まったく身に覚えのないことで責められ、無視され、除け者されたなら、私たちの心はしおれてしまうのです。

この世には、なぜ、こんなことで苦しまなければならないのか、訳の分からないことが多くあります。いい加減な生活をしている人が良い目を見、正しく歩もうと努力めている人が辛いことに会うことがあります。だからといって、正しく歩むことをやめてはいけません。正しく歩むことは、それ自体意義があるからです。そうしたことを含め、聖書は、どんな痛みや苦しみにも意味があり、意義があると教えています。しかも、神を信じる者が受ける苦しみは、神の大きな愛から出ていると告げています。苦しみの意味や意義について、聖書は多くのことを教えていますが、ここでは、三つのこととお話します。

第一に、痛みや苦しみは、私たちを守ります。怪我をすれば痛みを感じます。病気になれば熱が出て身体が苦しくなります。それで手当をしたり、安静にしたりします。もし、そうした痛みや苦しみがなければ、知らない間に病気が進んでしまいます。痛みや苦しみは、神が私たちをもっと悪い結果から守るために与えてくださるシグナルなのです。それは、精神的な痛み、苦しみでも同じです。私たちが良心の痛みを感じたり、不安になったりするとき、それは、私たちを大きな罪や危険から守るための神からの語りかけであることが多いのです。

第二に、痛みや苦しみは、私たちを神の子どもとして形づくりします。彫刻家が木彫りの作品を作るとき、鑿（のみ）で木を削り、鑿（やすり）で仕上げます。そのように神も、私たちの

うちにある「神のかたち」を本来のものに形づくり、私たちを「キリストに似たもの」にするため、痛みや苦しみに、私たちを削り、また、研がれるのです。そして、それは、神が私たちを愛しておられることの証拠なのです。「肉の父はわずかの間、自分が良いと思うことにしたがって私たちを訓練しましたが、霊の父は私たちの益のために、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして訓練されるのです」（ヘブル 12:10）とある通りです。

また、第三に、私たちが受ける痛み、苦しみは人生に実りをもたらします。苦難は非生産的なものではなく、生産的なものなのです。ローマ 5:3-4 にこうあります。「それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。」神は「苦難」という原材料から、「忍耐」や「練られた品性」、そして「希望」を生み出してくださるのです。工場で原料が次々に加工されて商品が出来上がっていくのに似ています。

ずっと以前ですが、日本で醤油工場を見学したことがあります。大豆と同量の小麦粉を混ぜて蒸し、麴（こうじ）を作り、麴に食塩水を加え諸味（もろみ）を作ります。それを半年かけて発酵させ、熟成してから、搾（しぼり）り、火入れをして醤油が出来上がります。工場見学するとき、工場の高いところから、諸味を発酵させる大きなプールがいくつもあるのを見せてもらいました。それを見て、麴菌が見えないところで働き、醤油が造られていくように、聖霊も見えないところで働き、「苦難」から「忍耐」、「忍耐」から「練られた品性」、「練られた品性」から「希望」への工程を導いてくださっているのだ

なあと思いました。

三、苦難は栄光に

ローマ 5:3-4 では「苦難」から「希望」が生まれるとありましたが、それはどんな希望でしょうか。ローマ 5:2 に「このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいますが」とあるように、それは、やがての日に天の栄光にあずかる希望です。苦難が栄光に変わるという希望です。パウロは、この希望のゆえに、「私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすのです」と言うことができたのです。

じつは、「栄光」という言葉のヘブライ語 (תִּבְּרָה) には、「重い」という言葉から来ています。それでパウロは、栄光の「重さ」にくらべれば、苦難は「軽い」と言ったのです。栄光が「重い」といっても、それは目方で量れるようなものではありません。「重い」というのは、現実のもの、大切なもの、変わらないもの、満ち溢れたものを意味しています。天の栄光に比べれば、地上の苦難は、とるに足りない一時のものに過ぎないと言っているのです。

もちろん、苦難を「軽い」と言うのは決して地上の苦難を「軽く」見ることではありません。信仰に反対する人たちは、「信仰は、現実を無視し、人々を苦しめている社会の不正に目をつむり、『天国に行けるのだから我慢なさい』と言うだけのものだ」と非難しますが、どんなに社会を改善し、人々の暮らしを豊かにしても、罪がある限り、社会の矛盾は決して解決されず、人生に苦難はついて回ります。信仰者は人々の苦しみ

を和らげるために働きますが、同時に、最終的な解決は天にあることを信じ、キリストの栄光が現れ、神の国が完成する時を待ち望んでいます。この希望がなければ、私たちは、たちまち、地上の苦しみに押しつぶされ、がんじがらめにされ、それに負けてしまいます。栄光の希望があればこそ、それを乗り越えて、この世で苦しむ人たちのためにも、希望をもって働くことができるのです。栄光の希望を伝えることによって、人々を助けることができるのです。

しかし、苦難が栄光に変わることは、ほんとうに確かなことなのでしょう。私たちは、まだ将来の栄光を見ていませんが、それが確かなことを知っています。イエスが十字架ののち復活され、天の栄光にお帰りになったからです。イエスが私たちも同じ栄光にあずかると約束されたからです。そして、イエスはその約束の保証として、私たちに聖霊を与えて証印としてくださっているのです（エペソ 1:14）。

私たちが体験する苦しみは、イエスが味あわれた苦しみとは比べものにならないほど小さなもの、パウロが受けた苦しみから見ればほんとうに軽いものだと思います。パウロの苦難はイエスのためや他の人のためのものでしたが、私たちのものは、自分たちのいたらなさから出たものかもしれません。しかし、そうであっても、それによって忍耐を学び、練られた品性が人格のうちに結ばれるとき、神は、私たちに重い、永遠の栄光の希望を、あふれるばかりに与えてくださるのです。この希望によって、苦難は苦難で終わらず、そこから平安や喜びが生まれてきます。日常生活での小さな苦痛やトラブルであっても、それを栄光の重りで正しく量り、永遠の栄光の光で見究めたいと思います。そのとき、私たちが受ける苦しみ、それが大きかろ

うが、小さかろうが、その意味と意義を知り、それを乗り越えていくことができると信じます。

(祈り)

父なる神さま、きょう私たちは、「苦難は栄光となる」ことを学びました。あなたは、そのことをイエスの十字架と復活によって示してくださいました。使徒たちをはじめ、多くの信仰者たちの生涯は、その希望に生きることの模範です。それに倣う者としてください。信仰の目であなたの栄光を見上げ、この世で体験する痛みや苦しみを正しく理解できますように。自らがそれを乗り越えるだけでなく、苦しみ痛む人々に慰めを与えることができますよう、私たちを導いてください。イエス・キリストのお名前です。